

ディケンズとチェスタフィールド卿

——『バーナビー・ラッジ』における
『息子への書簡集』について——

榎 本 洋

序

『バーナビー・ラッジ』(*Barnaby Rudge*)は1780年6月にジョージ・ゴードン (George Gordon) が起こした反カトリック運動を扱っている。1778年の英国の下院議会で「カトリック救済法」というローマ・カトリックへの偏見・迫害を少しでも是正する目的で可決された法案が原因となり、各地で反カトリック機運が盛り上がる。とりわけスコットランドでは1779年の騒乱を機にジョージ・ゴードン (George Gordon) が、「プロテスタント協会」の会長に就任するや、運動はし烈さを増し、1780年6月2日にロンドンで法案廃止を求めて請願の示威行動が行われたほどである。テキストでは49章から56章までの8章のスペースに、歴史的に起こった5日間、6月8日晚までの騒乱の有様が、バーナビー親子、メイポール亭の丁稚ヒュー (Hugh)、刑事のデニス (Dennis) を巻き込みながら、大規模な事件として描かれている。

ワールツ・クラシック版を編集したクライヴ・ハースト (Clive Hurst) はディケンズがゴードン騒乱を書くにあたり、参照した一次資料を挙げている。それによれば、ディケンズが目を通した活字資料はヘスター・スレイル (Hester Thrale)、レノルツ (Frederick Reynolds)、ロミリー (Samuel Romilly) 等の同時代の目撃者の手記や、バーク (Edmund Burke) をはじめ後世に名を遺した大物文人、そこにはジャコバイトの作家、トーマス・ホルクロフト (Thomas Holcroft) の *A Plain and Succinct Narrative of the Riots* (1780) も含まれるという。他にもゴードンの伝記作者、ロバート・ワトソン (Robert Watson) も列挙されている。Appendix Bで、“Dickens showed an unusual preoccupation with historical and contemporary politics when researching and writing *Barnaby Rudge*” と指摘されている通り (669)、ディ

ケنزは同時代の雑誌 (*Morning Chronicle*, *Daily Advertiser* など) を渉猟するのに余念がなかったと思われる。これはテキストがゴードン騒乱という歴史的な事件の再現を一方で意図する限り、史実の忠実性を作者が意識したからであろう。

実際のところディケンズはテキストの歴史的な正確さを担保しようと実在の人物をも登場させている。監獄吏アッカーマン (Ackerman) とヘアデル (Haredale) を助けるワイン商人のロングデイル (Longdale) が、それぞれ64章と61章で登場する。しかしながら、ゴードンを除けば、これらの人物は僅かに読者の前に姿を現すだけで、実質的な役割は殆どない。実際のところ、生存したアッカーマン、ロングデイルもどのような判断をし、行動を行ったかは、一般には全く知られておらず、その意味では別に彼らが登場しなければならないという必然性は感じられない。要は端役にすぎず、歴史における役割はあくまで受動的、忍従的である。つまり、ゴードン騒乱に巻き込まれる側であり、歴史を作る側ではない。

それに反して姿こそ見えぬものの、絶えずその存在、役割を意識させるのがチェスタフィールド卿 (Lord Chesterfield) と著書の『息子への書簡集』 (*Letters to His Son* 以下は『書簡集』と記す。) である。チェスタフィールド卿はサー・ジョン (Sir John) というチェスタフィールド卿をモデルにした人物を登場させることで、テキストに隠然たる影を投げかけており、テキストの構成・意味を考えると無視できない。『書簡集』も同様である。それは1780年代の騒乱前の1774年に発表されており、ディケンズが執筆に際して参照した資料と同じように、同時代を代表するテキストと考えても差し支えないだろう。実際テキストではサー・ジョンはチェスタフィールド卿の熱烈な信奉者という設定で、読者の前に姿を現す。サー・ジョンがヒューをテンブルの自室に招き入れる少し前、“the book”、つまり『書簡集』に手を置き、古今東西の文人と並べて、“the writer who should be his country’s pride, is my Lord Chesterfield.” (187) と述べるくだりがある。32章では息子のエドワードにエマ・ヘアデル (Emma Haredale) との交際を止めるよう、“graceful negligence” (258) という優雅なしぐさで言い聞かせている。ハプロット K. ブラウン (Hablot K Browne) の挿絵では背後のアブラハムの息子殺しを示唆する旧約聖書の絵とともに、サー・ジョンの左手前には“CHESTERFIELD”と書かれた本がある (259)。この絵に関してはまた言及するが、この章ではサー・ジョンとチェスタフィールド卿の

繋がりが否応なく意識させられる。

チェスタフィールド卿の名前を頻繁にテキストに登場さすことでディケンズは、読者に1780年代の風潮、現実性を垣間見せようとしている。そのためにチェスタフィールド卿の人となり、『書簡集』の出版の経緯等に簡単に触れておく必要がある。チェスタフィールドは1694年に第三代チェスタフィールド伯の息子として生まれ、ケンブリッジを卒業以来、ヘイグ(Hague)の大使などを歴任する。1732年、家庭教師エリザベス・ド・ブーシュ(Elizabeth du Bouchet)の間に一子をもうける。それが後のフィリップ・スタナップ(Philip Stanhope)である。スタナップは翌年、父のチェスタフィールド卿が結婚したため、庶子に甘んじなければならなかったが、父親はそのスタナップにも帝王学を授けようと考えたのだろう。二人の間で文通(といっても一方的に親から送られてきたのだが)が始まったのは、スタナップが5歳の1737年からである。68年にスタナップ本人が36歳で若死にするまで、およそ600通もの書簡が送られてきたことになる。チェスタフィールドは1773年の3月に79歳の生涯を閉じる。『書簡集』は1774年に*The Art of Pleasing*のタイトルで、まず後継者のフィリップ・スタナップの14通の手紙が、庶子の息子の手紙に先立って*Edinburgh Magazine*誌に掲載される。それから庶子フィリップ・スタナップの書簡、*Letters to His Son*が未亡人の尽力でロンドンとダブリンで2巻本で出されるが、同年のうちに増補され4巻本で再版されている。『書簡集』についてはひとまずこれでいいだろう。もっと大切なことはチェスタフィールドの著作集がJ. O. Justamowlの編集により1777年には2巻本で、さらに同じ年のうちに3巻本で再版されている事である。後者にはMatthew Mattyの回想録がついており、その後も増補を重ね詩や政治パンフレットも収録した*Miscellaneous Works*が1778年に3巻本で出ている。つまり、『バーナビー・ラッジ』というテキストが対象としている1780年前後の時代は、チェスタフィールド卿が作家・文人として遥かに高く評価されていた時期である。そして、その名に言及することが、他の資料以上に同時代性を強調するのに大いに役立っていたと思われる。実際、チェスタフィールドはゴールドスミス(Goldsmith)、ウォールポール(Horace Walpole)とともに当時、勇名を馳せていた文人作家の一人と目されていた。もっとも現在では、それらの作家に比べ魅力を欠いている(Lucas, 172)。

ディケンズ自身もチェスタフィールド卿について書簡の中で2, 3度言

及しており、デヴォンシャー・テラス (Devonshire Terrace) の蔵書の中にも1774年度版の4巻本の所有が確認されている¹⁾。ここで注意すべきことは初版に収録された手紙は一部(チェスタフィールド卿の)友人あてを除き、すべて長兄のフィリップ・スタナップ宛ての書簡であり、サー・ジョンがテキストで参照していたのも異母兄宛てであり、それはディケンズも同様という事である。表題の *Letters to His Son* は、見ての通りあくまで単数の存在であり、複数ではない。二人の「息子」の手紙が等しく(同時にという意味で)収録されたのは1901年のストレッチャー (Charles Strachey) 編集の版をもって嚆矢とし、以降オックスフォード版、エヴリマンズ・ライブラリ版もこれを踏襲している。本論文ではオックスフォードのワールズ・クラシック版(1998)を主に用い、適宜エヴリマンズ・ライブラリ版(1986)を用いたが、対象とした書簡は長兄あての手紙であり、後継者のではない。後者は前者の反復にすぎないからだ。

ここではチェスタフィールド卿の書簡集を、ディケンズが用いたその他の同時代資料と同じ位置に置くことを確認したい。ただその用い方は、1780年代という時代を単に絵画的に再現しようと意図したのとは異なる。史実の視覚的な再現よりも、ディケンズが目指したことは同時代社会の人々の振る舞いを再構成することである。チェスタフィールド卿の書簡が用いられたのも、ここに意味がある。それこそ、ディケンズが歴史的現実をどのように構成し、また過去という時代をどうとらえていたかを示唆しているように思われる。

II コンダクト・ブックとしての『書簡集』

『書簡集』が同時代の資料として、また文学的な機知に満ちた「作品」として評価をほしいままにしたことは言うまでもないだろう。しかしながら、江湖に広く歓迎されたその背景には、『書簡集』の放つ多様性がある。とりわけ、その啓蒙性と実用性である。このテキストは上流社会への栄達と成功を目指す野心に満ちた若者たちには、礼儀作法の格好の指南書としてもはやされたように思われる。同時代に流行した礼儀作法の指南書には *The Principle of Politeness* (1775), *The Fine Gentleman's Etiquette* (1776), *Some Advices on Men and Manners* (1776) があり、これらはカスティリオーネ (Castiglione) の『廷臣論』が翻訳紹介されたルネッサンス以来の伝統

と言えるだろう。『書簡集』はこうした指南書同様にその実用性で際立っているものの、目指すのは無味乾燥で堅苦しい、実務的だが有能な市民像とは異なっている。

チェスタフィールドの『書簡集』では、「紳士」の特性である「上品さ」「優雅さ」が一見したところ外面的な表層性にもかかわらず、高く評価されている。政治学者、木村俊道によれば、限られた社会とはいえ上流・貴族社会で頭角をあらわそうとする若き貴族の子弟にとり、そこで生きるための「政治は両義性を有するだけでなく、人間による操作や具体的な実践を伴う活動であるために、所与の現実を操作し、目的と手段をつなぐ高度な「技術」の洗練が不可欠になるからである」（木村、34）。チェスタフィールドは貴族の社会という限られた公共空間を所与の現実とみなし、そこで幅広い作法を身につけるための体験的な実践知を説いたのである。とはいえ体験的な知を整然と体系的に説いたというよりは、断片的なアマルガムである。従って本論文ではチェスタフィールド卿の書簡全般にわたり述べられていることを説くのではなく、ディケンズが反発し、その反応がサー・ジョンの造型につながったと思われる次の事について主に述べていく。先ず外見の重視、そして社交における“the art of pleasing”、政治的な「手腕」についてである。

チェスタフィールドにとり所与の現実を操作することは、まず「徳のある振る舞い」により人々の歓心を得ることだという。それは本来、他者の高い評価、賛辞を得ることが、人の自負心をいやす動機の根本原則とみるからで、そのための手段として“decency”（礼儀正しさ、上品さ）といった要因がいやがうえにも強調される。そして、「価値ある振る舞い」を際立たすためにマナーの重要性が叫ばれる（1749年4月19日の書簡）。

By *manières*, I do not mean bare common civility; everybody must have that, who would not be kicked out of company; but I mean engaging, insinuating, shining manners; a distinguished politeness, an almost irresistible address; a superior gracefulness in all you say and do. (Everyman's Library, 98)²⁾

どちらかと言えば否定的に扱われる「体面の良さ」、「体裁」は、ここでは真逆に評価される。かつての同僚であるマルバラ（Malbrough）公爵の政治力を支えたのも、優雅な身だしなみ（117-8、85-86）と流暢でさわ

やかな弁舌の才、行き届いた洗練さ、そして評価をもたらす気品ある服装の在り方 (127) など、一見表面的な視覚的な要因と言えども決して疎かにするなと諭す。ベルリンで外交官として勤めている長兄に、分別があるなら “A man of sense carefully avoids any particular character in his dress” (128) と奇抜な趣味を避け、“Dress yourselves fine, when others are fine; and plain where others are plain; but take care always that your clothes are well made, ...” (128) 時宜にかなった身だしなみを口にしている。しかし一方で、内実を補うように経験を積み、交友関係にも注意を払うことが加えられる。とりわけ「優雅さ」(grace) は大切で、より輝かしい“virtue”も所作の優美さがなければ、魅力に欠けるといふ。優美な物腰を身に着けるためには、身体的な鍛錬も事欠かない。勧められるのは乗馬、フェンシング、ダンス等である。チェスタフィールドが言う “a man of fashion” (当世風の人) とは、身体的な鍛錬を経て「徳ある振る舞い」を身に着けた紳士である。

チェスタフィールドの思想はある種の理想論であり、それが陥る隘路をも示している。それを示したのがサー・ジョンである。彼も同じような特質をもって描かれていることに気づかされる。ヒューと会うときのサー・ジョンは “Completely attired as to his legs and feet in the trimmest fashion of the day” (186) と全くくつろいだ様子で、ソファァーに腰掛け、それから身に着けている “the various ornamental articles of dress” (186) がひとしきり強調される。サー・ジョンのうわべの良さはサム・タパーティット (Sam Tappertit) に対してもその “smile of unvarying serenity and politeness to appear upon his face” (198) が強調される。本心とは裏腹に、“despisers of mankind” (196) とそのシニシズムさえ潜ませているにもかかわらず。そうしたサー・ジョンが身に着けている最大の処世術が、相手の警戒心をとく、彼の微笑みである。エドワードには “the calmest voice” (261) で語り掛け、バーデン嬢 (Miss Varden) に行く道すがら乞食にさえ “pleasantly” (216) に微笑みかける。バーデン一家の人々を優雅な身のこなしで虜にしてしまう; “Mr. Chester, ..., talked to them in the most delicious manner possible; and quite enchanted all his hearers” (220)。サー・ジョンの慇懃な態度は、あちこちで強調される (184, 189)。ヘアデルがサー・ジョンを非難しても、“an engaging smile” を振りまきやり過ぎす (346)。優雅な身のこなしとそれを効果的に演出させる弁論の才。その点ではサー・ジョンはチェスタフィールド卿が主張する弁舌 (eloquence) の才を身に着けた完

壁な紳士である。弁舌については以下のように述べている。

When you come into the House of Commons, if you imagine that speaking plain and unadorned sense and reason will do your business, you will find yourself most grossly mistaken. As a speaker, you will be ranked only according to your eloquence, and by no means according to your matter; everybody knows the matter almost alike, but few can adorn it. I was early convinced of the importance and powers of eloquence; ...

(1751年3月18日 p. 225)

とはいえこの「完璧さ」ゆえに、彼が周囲と相容れぬことが示唆される。サー・ジョンがヘアデルと同じくフランスで教育を受け、大陸譲りの作法であることが分かる(346)。チェスタフィールドが唱える「優美さ」もフランス風であり(1748年11月18日、115)、その異質性が仄めかされる。ところでテキストではサー・ジョンの学問的な素養については触れられていない。43章のウェストミンスター寺院でのヘアデルとの会話から、若い頃はフランスで学び、フランス文化に親しんだことしか仄めかされていない。23章でミルトン、シェイクスピアの名前をチェスタフィールド卿と一緒に挙げているくらいで、教養のほどを知るすべは乏しい。『書簡集』において、学識、教養を装飾と考える見方は同じである。

チェスタフィールドの外面重視と功利主義的な実用性重視の考え方は徹底しており、それは紳士教育、教養にも及んでいる。もちろん学問、読書を重ねることで、知識の取得を怠らぬよう再三、注意している(1748年4月1日、75)。ポープの詩を引用したり(41)、キケロ、ドライデン、スイフト(178)、ボリングブルック卿(Lord Bolingbroke)(226)、ヴォルテール(256)、セネカ(14)、古代ローマ史など広く西洋の古典等(同時代も含め)に目を向けさせようとしている。しかし、一方では“pedantry”を鼻にかける学者、とりわけ古代作家の片言隻語を何かと引用する学者の「レトリックと弁術」(“reasoning”, “speaking”)がすべて正しいわけではない、と指摘している。ここまでは至極常識的な見解であり、ディケンズととりわけ批判はしないだろう。しかし、次に引用するくだりは、やはり大いなる誤解を招く恐れがある。

Upon the whole, remember that learning (I mean Greek and Roman learning) is a most useful and necessary ornament, which it is shameful not to be master of; . . . (1748年2月22日 p. 67)

もちろん、ラテン語などの古典語やドイツ語、フランス語などの現代語、歴史、哲学、修辞弁舌などは紳士の嗜みとしてどれ一つ欠かせないものだろう。しかし、チェスタフィールドが“eloquence and delicacy of expression” (230) を学ぶことや、言葉の用い方でフランス人を見習う事とかにこだわると (353)、内実としてよりも“necessary ornament”としての学問、作法としての学問というあらぬ側面を垣間見せるのも事実である。そうした、表面性、偽善性を最大限に利用するとサー・ジョンのような人物になるのだろう。ヘアデルが“a smooth man of the world” (102) といったように、ディケンズはサー・ジョンの反人間主義的な側面を次のように描いている：“The despisers of mankind — are of two sorts. They who believe their merit neglected and unappreciated, make up one class; they who receive adulation and flattery, knowing their own worthlessness, compose the other.” (196)。サー・ジョンのような“the cold-hearted misanthropes”は後者に分類される。

III 危険な書簡集

ところで前章で『書簡集』が「所与の現実を操作し、目的と手段をつなぐ高度な「技術」の洗練」を意図していることを指摘した。そこでは自らの行為が他人に与える印象をよりよく操作することで、相手にいかに取り入るかという一連の作法から社交術に至るまで、また身体の振る舞いから誇示的な学問習得に至るまで、幅広く忠告がなされているのを確認した。しかし、それを体現したと思われるサー・ジョンの振る舞いが持ついかかわしさをドリーが感じたように (26章)、『書簡集』が説くモラルの安直さは同時代の人々にも等しく感じられたようである。ルーカス (F. L. Lucas) が紹介するように『書簡集』はかなりの売り上げを誇ったものの、同時代の「暴力的な批判」 (“violent criticism”, 162) にもさらされたのも事実である。サミュエル・ジョンソンは言わずもがな、*Gentleman's Magazine* の誌上でも盛んに批判されたという。批判はウィリアム・クロフォード (William Crawford) の *Remarks* を経てサミュエル・プラット (Samuel

Pratt) という今では全く忘れられた *The Pupil of Pleasure* などのパステイッシュを生むに至ったという (Lucas, 162)。事情はヴィクトリア朝も同じである。ディケンズの友人でジャーナリストの G. A. サラ (George Augustus Sala) は *Lady Chesterfield's Letters to Her Daughter* (1864) というパロディーを出している。かのサッカーも *The Virginians* (1859) のなかで、25～30章まで、チェスタフィールド卿を登場させ、批判しているという。³⁾『書簡集』は多くの反チェスタフィールド派を生んだのだ。

こうした反発の多くは、見かけのモラルを重視する姿勢に、偽善が生じる余地を見たからである。思想家、バジル・ウィリー (Basil Willey) は「チェスタフィールドの道徳は…生命の深みよりも模倣を好み、精神的活力よりも端正・機知・優雅を重視する。彼の理想はけっしてすべてが墮落しているわけではないが、そこから墮落に通じる可能性があった」と *The English Moralists* で断じている (282)。その危惧がはっきりするのはチェスタフィールド卿が、人に取り入り、阿ることを“the art of pleasing”と称し、それを目的化しているからである。既知の知見と体験を帰納すれば、単純に導き出せるかのような安易さと横柄さが嫌悪感を催したのだ。例えば次の書簡は好例である。

The art of pleasing is a very necessary one to possess; but a very difficult one to acquire. It can hardly be reduced to rules; and your own good sense and observation will teach you more of it than I can. Do as you would be done by, is the surest method that I know of pleasing. Observe carefully what pleases you in others, and probably the same things in you will please others. If you are pleased with the complaisance and attention of others to your humours, your tastes, or your weakness, depend upon it the same complaisance and attention, on your part to theirs, will equally please them.

(1747年10月16日 p. 57)

“Do as you would be done it, is the surest method that I know of pleasing” という定言命法的な原則が「紳士」として「徳の高い振る舞い」という高邁な理想に大きな変質をもたらしたことは、容易に考えられる。「喜ばす術」という戦術ゆえに、「徳の高い振る舞い」という無垢な手段自体が目的化し、それが「人を喜ばすために、へりくだった振る舞いをする」という、変質

を余儀なくされてしまうという矛盾をはらむことになってしまったのだ。

この矛盾はチェスタフィールドが、友人としてどのような交友相手を選ぶかという時に行う助言に如実に表れている。“good company”をチェスタフィールドは“the people of the first fashion of the place” (89) と定義すると、彼らの性向 (“turn”)、所作 (“manners”)、話し方 (“address”) をつぶさに観察し、自家菜籠中の物にすることで、彼らに合わすよう忠告している。相手の人となりを見定め、その長所を求めよと助言は続く：“Seek for their particular merit, their predominant passion, or their prevailing weakness; and you will then know what to bait your hook with to catch them” (89)。しかし、相手が自分の存在をなくしてはすまされぬように振る舞い、自らのために相手を用いよと言うに及ぶと、不穏な印象を与える。背後から人を操り、折伏する行いが次の書簡よりうかがい知れる。

You must be sensible that you cannot rise in the world without forming connections and engaging different characters to conspire in your point. You must make them dependants without their knowing it, and dictate to them while you seem to be directed by them. Those necessary connections can never be formed or preserved but by an uninterrupted series of complaisance, attentions, politeness, and some constraint.

(Everyman’s Library, 1749年11月14日 p. 127)

ここでチェスタフィールドが説いていることは、自分の都合よく動くような人物を友人として選ぶ、またはそのように意図する、仕向けるということである。「喜ばす術」の目的には、人を操作する、“manipulate”し、他人を人の意思を実現させる手段として操り、利用するという陰湿な危険性を孕んでいるのである。ミロン・マグネット (Myron Magnet) は1750年5月6日の書簡を例に取り、そこでの語彙は主に“hunting”, “military conquest”を連想させるものであるとして以下のように指摘する：“The vocabulary — “have,” “manage,” “impose,” “catch,” “charge again,” “prevail,” “conquer,” “dictate”: words largely drawn from hunting and military conquest—amply indicated the kind of coercive control over people which is the goal of the art of pleasing, ...”(Magnet, 482)。同じことはサー・ジョンにも当てはまる。結論を言えば、チェスタフィールドが懸命に説いた理想的な紳士像の在り

方は、サー・ジョンという陰画としてテキストに隠然たる存在感を放っているのである。

IV 蠢くサー・ジョン

チェスタフィールドの説いた理想になるはずだった処世術の矛盾は、あからさまな形でサー・ジョン、その人と彼の行動に反映される。背後から人を操り、その行方を見守るのはサー・ジョンの特性である。ヘアデルはサー・ジョンの「才覚」に“Men of your capacity plot in secrecy and safety, and leave exposed posts to the duller wits”(347)と皮肉めいた批判をしている。しかし、ヘアデルの嫌味をサー・ジョンは「優雅に」(“sweetly”)やり過ごす。

背後から人を操り、目的を達する。これがいかに発揮されるのは、彼がエドワードとエマの仲を裂くときである。ヒューを使って二人の間を取り持ちするドリーから手紙を奪わせ、“Dolly’s lost epistle”(190)を受け取ると、ヴァーデン夫人にこれ以上二人の仲をこじらせぬよう根回しをする(27章)。しばらくして、エドワードは恋人が離れていくのを嘆くようになる(32章)。同様にヘアデルに対しても陰険な策をめぐらす。ヘアデルとサー・ジョンの対立は若き日までさかのぼるが、それが明らかになるのは47章でかつての旧友がまみえる場面である。この時はガッシュフォード(Gashford)も同伴している。三人はかつてパリのオメール学院で学んだ同窓である。ガッシュフォードはこの時、カトリック教徒であり、以降、改宗した日和見主義者であることを暴露される。ところで、サー・ジョンとヘアデルがパリで学んだ経緯は、それぞれ異なる。サー・ジョンは、そもそも国教徒、アングロニカンであり、フランス語を学ぶために行かされたのであり、そこにはチェスタフィールド卿のフランスかぶれが反映されている。一方のヘアデルはカトリック教徒ゆえに故国イングランドではなく、フランスでの教育を余儀なくされたとある。次に様に語られる。

“Add to the singularity, Sir John,” said Mr. Haredale, “that some of you Protestants of promise are at this moment leagued in yonder building, to prevent our having the surpassing and unheard-of-privilege of teaching our children to read and write — here — in this land, where thousands of us enter

your service every year, and to preserve the freedom of which, we die in bloody battles abroad, in heaps: and that others of you, to the number of some thousands as I learn, are led on to look on all men of my creed as wolves and beasts of prey, by this man Gashford. Add to it, besides, the bare fact that this man lives in society, walks the streets in broad day — I was about to say, holds up his head, but that he does not — add it will be strange, and very strange, I grant you.” (346)

ヘアデルはサー・ジョン、そして日和見のガッシュフォードなどのプロテスタント教徒により故国での教育が限られた憤りをぶちまける。それに対してガッシュフォードが割って入り、しばらく二人の応酬が続く。ガッシュフォードはヘアデルを“Mr. Haredale is a sufferer from the penal law”という社会的、政治的な法制度に求めたのに対して、ヘアデルはサー・ジョンらの策謀にその非難を向けているからである。ここでは、ガッシュフォードの口から法律が言及される以外は、それが及ぼした政治的な災難については深く掘り下げられた様子はない。ここで言われている“the penal law”に関しては、ゴードン・スペンス (Gordon Spence) 等編集の旧ペンギン版にもとりわけ記載がない。松村赴編の『英米史辞典』によれば、16から17世紀にアングロニカンの洗礼忌避者を取り締まるために定められた法律で、宗教刑罰法の一部である。1571年～93年にアングロニカンの権威が強化されていく中で、制定された複数の法律を指すものと思われるが、「実際にはあまり厳しくは履行されず、18世紀にはほとんど適用されなくなり、同世紀末には大部分が撤廃された」という(村松、568)。一見したところヘアデルがサー・ジョンを“Is it not enough, my Lord, ... That I, as good a gentleman as you, must hold my property, such as it is, by a trick at which the state connives because of these hard laws; ...” (349) と権力のはく奪を批判するくだりは、ワールズ・クラシック版の註に“Before then, Catholics had to find ways round this Penal Law in order to keep hold of their land” (689) と簡単に記載があるだけで、カトリック教徒がイングランドでの教育の機会と土地購入で不利を被ったという事である。これにヘアデルが非難するガッシュフォード、サー・ジョンらのプロテスタント教徒として、どう関わったのかテキストの物語では展開されていない。仮にそのような契機があったとしたにせよ、サー・ジョンを評したヘアデルの反発は個人的な次

元にとどまり、迫害の歴史はあくまでプロテスタント教徒全般によるものである。“Men of your capacity plot in secrecy and safety, and leave exposed posts to the duller wits” (347) というヘアデルの批判は、背後から人を操り、扇動するサー・ジョンの陰謀家的側面に向けられたものであるが故に、批判自体は個人的次元に留まっている。

昔からある根深いカトリックとプロテスタントの対立と確執は、こうして背後に退く。そうになると、この騒乱も社会的、宗教的な次元ではなく、サー・ジョンという稀代の悪漢による個人的演出という印象が強くなる。それがはっきりするのは40章で、ヒューと面会し、ヘアデルへの復讐を彼に刷り込む場面においてである。ヒューに“Didn't you give me in this room, this evening, any other reason; no dislike of anybody who has slighted you, lately on all occasions, abused you, treated you with rudeness; . . .”と聞くとヒューは“I'd do anything to have some revenge on him . . .”と答える場面である(322-323)。この“him”がヘアデルであることは間違いない。この場面はエドワードが失踪して5年も経過している。従って、エドワードとヘアデルの養女エマの仲を引き裂くというより、積年の怨恨に基づく行為と考えたほうがわかりやすい。個人的な怨恨を基に、ヘアデルを追い詰めようとする。サー・ジョンは更にヒューにウオレンの館の襲撃をするよう、背後から画策する(54章)。いずれの事件にも、サー・ジョンは黒子として事件を背後から操る存在として、読者に大きな印象を残す。次に挙げる例は騒乱を背後で操るサー・ジョンの姿と、事件がもつぱら夜半に行われることを示す個所である。

サー・ジョンは、夜半に、しかも秘密裏に行動する。メイポール・インでヘアデルと会い、エドワードとエマの道ならぬ恋をどうしたものか、話し合いを持つのは夜も深まった頃である(12章)。また、バーナビーと昨晚あったと、その際にジョー・ウィレット (Joe Willet) に語っている(90)。既に取り上げたヒューの訪問も夜中であり(28章)、五年経過して会う時も同じである。ミドル・テンブルでサー・ジョンは再びヒューの訪問を受けるが、訪問があまりに遅かったのでポーターに不信感の眼差しで見られる(319)。扇動した騒乱は6日間にわたるが、闇夜を焦がした夜間の描写が目につく。バーナビーが群衆に加わった48章を始まりとみなすなら、52章にウェルベック街の広場に群衆が集結するのが“Sunday night”(418)と記されているように休日の夜間である。その前の章では徒弟のタパー

ティット深夜帰宅したために、バーデンに叱責されるが、夜中の騒乱に巻き込まれていたのは間違いない(408)。夜のチッグウェルは“disturbed state of the town”(484)とヘアデルの視線を介して語られ、明け方の様子はその凄まじい惨状ぶりを示している(532)。一方の暴徒は小隊に枝分かれすると、そのうちの二隊がスミスフィールドに向かって行進を始める。その様をガッシュフォードは高みの見物を決め込み、小隊を率いるヒューに合図を送るサー・ジョンの姿を認める。ヒューとサー・ジョンの視線が交わされ、暴徒が先導される。

At last it came up. It was numerous, and composed of picked men; for as he(Gashford) gazed down among them, he recognized many upturned faces which he knew well — those of Simon Tappertit, Hugh, and Dennis in the front, of course. . . . Hugh merely raised his hat upon the bludgeon he carried, and glancing at a spectator on the opposite side of the way, was gone. Gashford followed the direction of his glance instinctively, and saw, standing on the pavement, and wearing the bluse cockade, Sir John Chester.

(427)

ガッシュフォードの視線の先に、サー・ジョンが暴動を背後で操る黒幕として、読者の前に姿を現す。ただ、闇について先導される暴動が、サー・ジョンの個人的な怨恨を象徴するかのようなヒューによって先導されている暴徒は、それ自体、歴史的事件というより、サー・ジョンによる個人的な演出といった印象が強いと言えないだろうか。歴史的事件のはずの暴動は、こうしてチェスタフィールド卿がいう「徳ある振る舞い」が内包する、背後で人を操り扇動幫助するという危険性、矛盾により演出されるスキャンダラスな事件となる。

以上、チェスタフィールド卿の『書簡集』とともにサー・ジョンという人物をディケンズが創造するにあたり、奈辺に重点が置かれたかを、主に外見重視の姿勢と“the art of pleasing”の社交術に潜む矛盾と逆説という観点から検討してみた。ところで、こうしたチェスタフィールド卿が説く紳士像についてマグネットは、もう少し広い文脈において、思想史的な観点から分析を試みている。それによると、『書簡集』のさわりで説かれている自己愛、良心の理論が自由放任主義経済との類縁関係があると、論文の

註で指摘しているからだ：“...this theory of conscience discloses its consanguinity with the economic theory of *laissez-faire*, in that it seeks to establish that individuals, in variously pursuing their self-interests, advance willy-nilly, through the mediation of some mechanism established for that purpose by the Architect of the Universe, the interest of the community” (Magnet, 483)。そして、アダム・スミスの『道徳感情論』(*The Theory of Moral Sentiments*)も同種の精神構造(“consanguinity”)であり、アダム・スミスはもとよりバーナード・マンドヴィル(Bernard Mandeville)の「利己心」も含め同質の精神性が指摘できると、マンドヴィルまで射程を広げているが、果たしてそうであろうか。

マンドヴィルが主張する公益性、自由主義の思想は、確かに功利主義の先駆けであろう。しかし、功利主義、自由放任とはあくまで経済的な文脈において個人の財産権と所有権を保証するもので、一方のチェスタフィールドの『書簡集』が説くモラルは世俗的な社交・交渉術に過ぎず、そもそも比較の対象としては次元が異なる。ところで、ルカスはチェスタフィールドのシニシズムが、それほど強烈でないにせよフランス18世紀の作家ラクロ(de Laclos)が描く背徳者ヴァルモン(Varmon)との連想を仄めかず(Lucas, 174)。ヴァルモンはラクロ(de Laclos)の『危険な関係』(*Le Liaisons Dangereuses*, 1782)に登場する女性を手玉にする悪党である。どうやらマグネットは、功利主義的な自己の利益のみを追求するホップス的なリヴァイアサン的人物とヴァルモンのような悪党・悪漢的な人物を混同したようである。この場合、悪漢的な人物とは己の才覚、知力(腕力ではない)を頼りに、自らの利益を追求するのが典型的な人物である。代表例は詐欺師である。フランスでは出し抜かれ、騙される者に女性が多く、従ってピカロもヴァルモンのような漁色家が多くみられる。モンテッサ(F. Montessa)はチャンドラー(Chandler)などの研究を引用しながら、西洋文学におけるピカロを次のように定義している。悪者の典型的な犯罪は窃盗であると断りながら、取引対象の資本として「機敏な才知」が特徴だという。

悪漢(ヴァイン)の典型的な犯罪が殺人であるように、悪者(ロウグ)の典型的な犯罪は窃盗である。…彼は他人が苦勞して作ったものや、運良く手に入れたものを、才覚を働かして抜け目なく横取りしようとする。彼はトランプでいかさまをしたり、財布のひったくりをするか

もしれない。小切手や遺言状を偽造することもあろう。皮膚の潰症を描いて物乞いをしたり、詐欺の取引をしたりすることもある。政略結婚によって地位・財産を狙ったり、招かれた家のスプーンをポケットに入れたりする。… 山賊や海賊は厳密な意味での悪者の中にはいない。(モンテサー、16)⁴⁾

ここで、チェスタフィールド卿の『書簡集』に戻ろう。「徳ある振る舞い」という理想を一方では標榜しながら、その実現のためには「人を喜ばす術」という手段が高く掲げられる。この背景に垣間見えるのは、知力により、あまねく人事を統べようとするいびつな知性主義である。サー・ジョンも同じであり、腕力より知力を用いて人を出し抜くという意味ではヴァルモン同様の悪者(ピカロ)とみて差し支えないだろう。

V 『書簡集』の非身体性と身体性

今まで『書簡集』を歴史的な一次資料と同じように扱ってきた。主な理由として、『書簡集』がゴードン騒乱の直前に出版されたという同時代性である。この同時代性は著者のチェスタフィールド卿が、当時は盛名をはせた作家であり、歴史的な実在、実体を伴っていたために読者には、生々しい存在感を意識させるだろうという理由からだった。しかし、そうした事情とは別に、そもそもこの書簡が出版・公表を当てにしていない私信であり、内容も所作、振る舞い全般に関する作法書である事にも注意すべきだろう。つまり、歴史的な文書と言っても公的な批判よりも私的な性格、極論すればもっと限られた家族的な性格が際立っているように思われる。それが示されているのが27章である。ドリーがエドワードとエマの恋人の間をかけ持っているとの情報を得たサー・ジョンはバーデン一家を訪問する。ブラウン(Halbot K. Browne)の挿絵が示している通り⁵⁾、この個所はサー・ジョンがバーデン夫人の手から彼女の「愛読書」を手に取り、一方ではチェスタフィールドの『書簡集』へのあけすけな賛美を“My favourite book, dear madan. How often, how very often in his early life... have I deduced little easy moral lessons from its pages, ...” (219) と語っているところである。興味深いことは、挿絵ではサー・ジョンが夫人の手から取り上げたプロテスタント・マニュアル(The Protestant Manual of Christian

Devotion suited to all) が読者の視線を聖家族 (Holy Family) のぞんざいな絵柄へと誘導していることである (Dennis Walder, 97)。サー・ジョンとバーデン夫人を中止に据えた挿絵の構図も聖家族をパロディー化し、それを反復したものである。左側にドリー、バーデン夫人、召使のミッグス、そして右端にはサー・ジョンらが集まっている構図は、聖家族の図案と同じく三角形の安定した構図をなしている。バーデン夫人、サー・ジョン、そしてタパーティットの三人は、それぞれ夫への不服従、息子への虐待、親方 (バーデン) への反発などで共通した、同類である。サー・ジョンは皮肉にも親の子への義務をえんえんと説いている: “Heavy moral responsibilities rest with parents, Mrs. Varden.” (221)。

ここでは、サー・ジョンの愛読書の『書簡集』がプロテスタント・マニュアルと同列に置かれていることである。このプロテスタント・マニュアルは、既にテキストで何度も言及されて (48,66,158)、バーデン夫人が事あるごとに口にする “The Protestant Manual of Christian Devotions suited to all Times, Persons & Circumstances in public and private” という非常に長い題を持ち、1750年にプロテスタント協会から発行された家族向けの指南書、コンダクト・ブックの一種なのである。ところで、ドイツの英文学者シュッキング (Levin Ludwig Schücking) は、*The Family Instructor; Family Monitor* などのプロテスタント教徒用の家庭向けコンダクト・ブック、「家族教化書」の存在を指摘し (Schücking, 127)、キリスト教的な家父長的な風潮の中で、市民家族はこうした「家族教化書」を媒介に、個人の自己規律、責任感、父親の家長としての役割と家族の義務、キリスト教的な秩序のありかたが教え込まれたと指摘している。当然、バーデン夫人のプロテスタント・マニュアルも含まれる。そうすると、テキストにおける配置の意味も明らかになるだろう。つまり、*The Family Monitor* 等が市民家族のコンダクト・ブックなら、『書簡集』は貴族のそれとして、提示されているのである。

この対比は重要である。シュッキングによれば、プロテスタント・マニュアルなどの「家族教化書」が、徳、情愛という価値観を生産する機関として家族制度を文学の読者として、又は家族愛による家族の人間化というモチーフとして再生される集団、といった具合に積極的な価値がそこに見出せるからである (Schücking, 139)。反面、貴族社会・文化における家族は全く対照的である。チェスタフィールドの『書簡集』がそうである。『書

『簡集』が教えてくれる貴族特有の家族の文化世界とはいかなるものだろうか。再びシュッキングを見てみよう。スイフト、チェスタフィールド卿は、「結婚生活と家族における真になごやかなつながりに対しては、しばしば驚くほど無理解である」(Schücking,135)。スイフトを皮切りに、さらにこう続ける。：「…結婚を低くみるこのような見方が貴族世界で支配的であることは、内的必然性がある。そこでは快樂主義的人生観が定着しており、また婦人に対する貴族・宮廷人のきわめていんぎんな礼儀作法は、つねに女性蔑視と一つになっていたからである。その典型的な例はチェスタフィールド卿(1694-1773)である」(Schücking, 139)。テキストにおいても同じである。その薫陶を受けたサー・ジョンはバーデン夫人を相手に、自分が実弟の離婚に一方ならぬ尽力をしたことが、本人の口から自慢げになされ(27章)、結婚生活への関心は僅かたりとも感じさせない。

『書簡集』に目に着くのは、女性への功利主義的な見方である。女性を“pleasing and governing”することが大切であり、女性との交遊においては“douceur”つまり“an air of softness in the countenance, gesture, and expression”に関心を払わなければいけないと言う(1751年1月21日、217)。機能主義的な接し方ゆえ、女性を異性の対象としてみる結婚生活には全く関心を示していないようである。少なくとも4分の1に圧縮されたワールツ・クラシック版には、異性との愛情の交換、確認、そして夫婦生活については、殆ど触れられていない。僅かに後継者のスタナップに宛てた手紙の中で、軽率な結婚について戒めているくらいである(*Letters to his Son*, 378)。いづれにせよ、夫妻間の絆と愛情の欠如、親子の絆の脆弱さなど、家庭生活、夫婦生活を建設していこうという、意思は感じられない。

親子間の愛情の不在は、テキストでも歴然としている。サー・ジョンも夫人の存在は全く言及されておらず、独身者同然の生活を送っている。ちなみにヘアデル、ウィレット(Willet)も独身者同然であり、バーデン夫妻の間にあるのは微妙な距離感である。サー・ジョンの結婚生活に対する冷淡な態度は、“Father”と言って取りすがる息子に、“for heaven’s sake don’t call me by that obsolete and ancient name”(258)と言い放ち、話し合いに親子の愛情など介在する余地はないという、冷然たる姿勢からも伺える。彼は更に、父の意向と権威に逆らい、意に沿わない結婚をしたために廃嫡された実の兄の話を持って聞かす(261)。結婚への否定的な態度は、家父長たる父の権威を誇示することになる。これをうまく視覚化したのが

ブラウンの挿絵である。⁶⁾横柄な態度で息子に指示するサー・ジョンが左側に配され、右側には伏し目がちに立ちすくむエドワードが描かれている。サー・ジョンの右手には“Chesterfield”と記された一冊の大部な本が開いたまま置かれてあり、これが『書簡集』であることは明らかだ。左手には権威の象徴である、鞭を手に行っている。注目すべきは、その背後にある画中画である。この絵は「息子イサクの燔祭」という有名な旧約聖書の一場面を扱っている。神への絶対的な忠誠心を信仰として試されたアブラハムが、その証として息子のイサクをまさに屠ろうとしている個所である。これは神の掟、権威が疑う余地のない絶対的な権威であることを示す。西洋絵画ではレンブラントなどが扱った定番的な図柄である。聖書ではアブラハムは神への服従が認められ、イサクは殺されずに済む。しかし、テキストでは父の掟、権威が理不尽なくらい絶対視されている。サー・ジョンとエドワードに関係がアブラハムとイサクのそれと重ねあわされている事は言うまでもないだろう。けだし、アブラハムに在って、サー・ジョンにないのが敬虔な宗教心である。

『書簡集』が論ずる処世訓の破綻が、親子間の真の愛情の不在を意味するのなら、それを強烈に印象付けるのは、実の息子のエドワードとの関係よりも、ヒューとのそれである。ヒューが語る母親の受難、6歳の時に処刑され、父親はしらないと(194)断片的に語られるが、サー・ジョンが実の父親であることはバーデンの告発により明らかになる(75章)。サー・ジョンとヒューの関係は、チェスタフィールド卿と庶子フィリップ・スタナップの親子関係を皮肉ったものだろう。前者の場合、サー・ジョンは気づいていたように思われるが(194)、双方とも親子であることは知らない。それはヒューとエドワードの間も同じである。この二人は異母兄弟になるが、それをエドワードが知るのもヒューが処刑され(79章)、葬儀に立ち会った時で、数年前に顔を合わせただけだと答え、お互いに没交渉であることが知らされる(637)。処刑の前日、ヒューは異母弟の面会を拒んだという。

兄弟間の愛情の不在は『書簡集』も同じである。長兄であり庶子のフィリップ・スタナップと同名の後継者の間には、23歳という年齢差もさることながら、二人の間に何らかの精神的交流があったようには思えない。チェスタフィールド卿が後継者と文通を始めてから長兄は7年間存命していたが、チェスタフィールド卿は二人の「息子」が互いに気脈を通じるよう、配慮した様子も見られない。スタナップ家の親子関係はテキストに描

かれている通り、愛情や共感の交流とは無縁である。『書簡集』から見る限り、慈愛のこもった父としてではなく、批評家として忠告すると述べて憚らない(1746年10月4日、1751年5月6日)。ところが徹底した無関心と冷淡で接したサー・ジョンと異なり、チェスタフィールド卿は、まるで一挙手一投足を監視するという、干渉過多な態度で接したが、この一見両極な接し方がともにいびつな点では変わりようはないだろう。いびつということでは、そもそも『書簡集』に示される非身体、愛情不在に対して、一方では過剰なほどの身体性が主張される点である。1751年の5月16日の書簡では“elegancy and delicacy of expression”を身に着けるために、ダンス、フェンシング、乗馬などの鍛錬をも、怠らぬよう忠告されている(230)。『書簡集』にはこうした矛盾が、臆面もなく並べられ、ともすれば混乱した印象を与えがちなのである。⁷⁾

既に述べたことだが、ディケンズはゴードン騒乱のような歴史的な騒乱を社会的な事件として扱う視点には欠けている。個人的な怨恨を利用してヒューやデニスをけしかけ、暴動を起こそうとするサー・ジョンの姿が、そのことを象徴している。この事は『書簡集』を用いた意図せざる(と思われる)狙いを垣間見ることができる。チェスタフィールド卿の『書簡集』は、歴史的な資料としてディケンズが参照したにせよ、公的文書というより、私信であり、しかも社交指南作法書である。従って、公的な歴史事件を把握するには、いささか無理からぬところがあるのではないだろうか。にも拘らず、どうしてディケンズはチェスタフィールド卿を登場させたのであろうか。テキストにおいてチェスタフィールド卿の意味を問うのは、『書簡集』の同時代性とはまた別の意義もあるのだ。

VI 結論 身体・外見としての歴史

スティーヴン・マーカス(Steven Marcus)は決定的ともいえる『バーナビー・ラッジ』論の中で、テキスト内では権威が社会的・宗教的な次元において捉えられているのみならず、個人・私的な領域における把握が目立つと指摘している(Marcus, 172)。しかし、実際は公共空間での歴史事件も私的・個人的な領分に基づくと考えた方がいいだろう。それを象徴するのが5組の親子の在り方だという。ジョン・ウイレット(John Willet)とジョー(Joe)、バーナビー・ラッジと息子バーナビー、親方のバーデン

(Mr. Varden) と徒弟のタパーティット、そしてサー・ジョンとそれぞれの息子、庶子のヒューとエドワードの親子関係である。バーデンとタパーティットのそれは、親方が徒弟の監督権・保護権を担っていた時代背景を考えると、疑似的だが、実の親子間家に準じると思われる。マーカスはこう続けている：“In *Barnaby Rudge* ... and the conflicts which the riots represent are unmistakably recreated in the novel’s personal relations” (184)。

支配と服従の関係とその破綻としての暴力の連鎖が、五組の親子関係の在り方を介して語られる。ジョーは父親の専横ぶりに嫌気がさし、アメリカ行きの傭兵部隊に加わる (31章)。メイ・ポール亭で父親とともに常連客の嘲笑的になり、怒りを抑えかねているジョーを見かねたヘアデルが、思わず慰めているくらいである (33)。ジョーは片腕を失い戻ってくるが、失踪と再登場が、エドワードとほぼ同時期であっただけに、それだけ二人が被った親子関係の類似性も強烈である。この中で最もまともそうなのはバーデンだろう。しかし、そのバーデンですら子細に検討すれば、バーデン夫人の宗教的な偏屈さ (182)、召使ミッグスの気まぐれ、そして息子的な存在である徒弟のタパーティットへの管理の不徹底など、家父長としての地位と尊厳は必ずしも万全ではない。つまり、このテキストには、理想的な家長とそれを基にした健全な、秩序ある家族関係は存在しない。そうした個人の権威の崩壊と墮落が、社会という公共の空間において出来たのがゴードン騒乱に見られる群衆の暴発である。

もしこのテキストの中にスコット風の歴史小説を見ようとすれば、テーマになるのはカトリックとプロテスタントの抗争という宗教対立であり、それに沿って物語は展開されなければならない。具体的にはカトリック教徒のヘアデルの養女エマとプロテスタント教徒エドワードの両家を軸とした宗教的対立と二人のロマンスの行方を、それぞれ横と縦の軸として物語が織られるはずだ。実際はカトリックとプロテスタントの両派の対立、ヘアデルや商人のロングデイルやゴードンらの対立などは、それほど明瞭な対抗軸となっていない。ロングデイルなどは単なる暴動の被害者であり、カトリック教徒ゆえに暴力に晒されるというより、暴徒の気まぐれな暴力に左右されていると見たほうが良い。従って物語の進展とともに、(スコットなら最大限に描くだろう) ロマンスの行方も暴徒による騒乱に文字通り一掃されてしまう。そもそも登場人物としてのエマには、殆ど存在感がない。

つまりディケンズが描いたのはカトリックとプロテスタントの対立という宗教的抗争としての歴史事件ではない。ロゴス(論理)としての歴史は放棄される。むしろ親の子に対する振る舞い、礼儀作法の仕方など身体としての歴史が語られる。チェスタフィールドの『書簡集』が持ち出された理由もこの辺にあるように思われる。人格ある人物が行動を起こせば、その行いは正しいものと解釈される。その結果起きた出来事はすべて正しいものと見なされ、それが社会や政治の力学にどう影響を及ぼし、また及ぼされるかは関心の埒外にあるのだ。つまり、名望ある指導者が行動を起こせば、それは革命という歴史的必然性と一致するという、歴史の人格主義的、またはそれに基づく身体感覚に基づいた解釈なのである。それを明らかにするのが、チェスタフィールドの『書簡集』というテキストである。

☆本論文は2016年度秋季ディケンズ・フェロウシップ日本支部(中央大学)のシンポジウム『ディケンズと18世紀』で発表した原稿を、大幅に補正したものである。有益なコメントをいただいた諸先生方に感謝します。なお本文からの引用はオックスフォード・ワールズ・クラシック版である。

註

- 1) ディケンズが所有していたと思われるチェスタフィールドの『書簡集』は4巻で1774年発行か、それより後、との記載が、ピルグリム版ディケンズ『書簡集 4巻』にある(*The Letters of Charles Dickens volume Four 1844-1846*, 717)。但しディケンズが書簡でチェスタフィールドについて直接言及した箇所は皆無で、間接的に仄めかされたところ2か所あるに過ぎない。1847年1月18日日付の書簡(*The Letters of Charles Dickens volume Five 1847-1849*, 10)と1852年8月18日日付の書簡(*The Letters of Charles Dickens volume Six 1850-1852*, 741)と1852年8月18日日付の書簡である。
- 2) 本論文では主にワールズ・クラシック版を用いたが、必要に応じてエヴリマンの版を使用した。その際は断ってある。
- 3) サッカレーとチェスタフィールドの関係に関しては佐々木隆先生(京都大学)よりご教示いただいた。記して感謝します。
- 4) 「悪漢小説」の悪漢に関しては、定義があいまいで、どの文学辞典を見ても、悪者、ごろつきとしか記していない。しかし、ここでは「悪漢」の特徴が腕力ではなく、知力・才覚であることを確認しておきたい。モンテサーの『悪者の文学』(南雲堂)に掲載されている作品一覧が、そのことを教えてくれる。「(詐欺師)グスマン・デ・アルファラーチェの生涯」(1599)とか、「ペテン

師ドン・パブロスの生涯」(1626)、「ずる賢いジステヌ」(1635)といった表題が見えるのも、そのためである。ちなみに、ディケンズで悪漢的な人物はこのサー・ジョン以外では、『ピクウィック・ペイパーズ』に登場するジングル (Alfred Jingle) だろう。

5)



6)



7) *Barnaby Rudge* のテキストを身体性という観点から考察することは今後に委ねたい。ただ、一部ではマーカスが精神分析的な手法を用いてデニス、ヒューなどの役割を論じている。

参考文献

- Chesterfield, 4th Earl of. *Lord Chesterfield's Letters* Oxford: Oxford University Press, rpt.1998
- Chesterfield, 4th earl of. *Letters to His Son and Others* London: Everyman's Library, rpt.1986.
- Dickens, Charles. *Barnaby Rudge* Oxford: Oxford University Press, rpt.2003
- Dickens, Charles. *Barnaby Rudge* Harmondsworth: Penguin Books, rpt.1987
- Dickens, Charles. *The Pilgrim Edition The Letters of Charles Dickens volume four 1844-1846* Oxford: Clarendon Press, 1977
- Dickens, Charles. *The Pilgrim Edition The Letters of Charles Dickens volume five 1847-1849* Oxford: Clarendon Press, 1981
- Dickens, Charles. *The Pilgrim Edition The Letters of Charles Dickens volume six 1850-1852* Oxford: Clarendon Press, 1988
- Lucas, F. L. *The Search for Good Sense Four Eighteenth Century Characters* London: Cassell & Company Ltd, 1958
- Magnet, Myron. "Lord Chesterfield, *Barnaby Rudge*, and the History of Conscience." *Bulletin of the New York Public Library*, 80 (1977) pp. 474-502
- Marcus, Steven. *Dickens: From Pickwick to Dombey* London: Chatto & Windus, 1965
- Monteser, Frederick. *The Picaresque Element in Western literature* Alabama: The University of Alabama Press, 1975
(邦訳 『悪者の文学：西洋文学のピカレスク要素』、南雲堂)
- Schücking, Levin. *Die Familie im Puritanismus: Studien über Familie und Literatur in England im 16. und 18. Jahrhundert* Leipzig: B. G. Teubner Verlag, 1929
(邦訳 『読書と市民的家族の形成』、恒星社厚生閣)
- Spence, Gordon. "Introduction" to *Barnaby Rudge* Harmondsworth: Penguin Books, rpt.1987
- Walder, Dennis. *Dickens and Religion* London: George Allen & Unwin, 1981
- Wiley, Basil. *The English Moralists* London: Chatto & Windus, 1965
(邦訳 『イギリス精神の源流 モラリストの系譜』、創元社)

邦語参考文献

- 木村俊道 『文明と教養の〈政治〉 近代デモクラシー以前の政治思想』 東京：講談社 2013
- 松村赴、富田虎男編 『英米史辞典』 東京：研究社 2000

Dickens and Lord Chesterfield:
Letters to His Son in Dickens' *Barnaby Rudge*

Hiroshi ENOMOTO

In *Barnaby Rudge* Dickens' use of historical material is primarily concerned with contemporary documents in 1780s. Personal memoirs and confessions by well-known as well as little-known people are fully employed and used in building up vivid pictures of revolutionary England in the late 18th century. However, Dickens did not always intend to give us an exact and concrete presentation of Gordon Riots in 1780s. Rather than to pile up accurate historical facts through documentary researches, his intention lies in his ability to demonstrate how the people of the time reacted to a brutality of revolutionary acts in their ages. In fact, his primary concerns with this famous historical incidents indicate Dickens' energy to create a revolutionary atmosphere through physical behaviors of several characters involved with historical events. Most of the characters' behaviors and activities in this novel can enable us to interpret their meanings and significances on a criticism of Lord Chesterfield's *Letters to his Son*. Unlike other historical documents and pamphlets utilized by the author, this collected letters serves as a kind of conduct book to regulate and govern the character's actions. To grasp the heart and mind of the people through descriptions of the behaviors, Dickens concentrated on the presentation of revolutionary 18th century through the allusions to Chesterfield's *Letters*. Of course, some critics say that historian or historical writers, even though they were not professional ones, shouldn't let their views colour the judgement of the event, Dickens has a variety of objects to penetrate the significance of human mind.